



~伊13
1989
18上



門 13
1989
卷 18

南北太平記圖會卷之十五下

三編

目錄

正成マサナリ作シ剝ヒ楯タテ拉ヒ差サ敵ト
 義ヨシ貞サダ省シヨウ身シ覘ヒ尊ソン氏シ
 正成マサナリ遣ツク泣ナキ男ヲ欺ヒ敵ト兵ヲ
 尊ソン氏シ落ツク京キョウ都ト趣ヒ丹ニ波ハ
 宇ウ都ツ官クワン重シヨウ耻チ降カ官クワン軍クン
 正成マサナリ智チ辨ヘン述シツ必ヒツ勝シヨウ謀ボウ
 豐トヨ嶋シマ川カハ義ヨシ貞サダ戰セン直チキ義ヨシ
 正成マサナリ進シン大ダイ破ハ足ソク利リ兵ヘイ
 正成マサナリ再サイ進シン破ハ足ソク利リ兵ヘイ

附
泣男ノ傳

尊氏敗走落筑紫

主上從山門還幸京都

義貞義助昇進官位

兩宮戀慕基久娘

基久因邪曲被改補

南北太平記圖會卷之十五下

三篇

正成作剝楯拉差敵

義貞一騎省身覘尊氏

去程小楠判官結城入道名和伯嗜守ハ糺の主人より押上せよ出
 雲路の邊小火火かけし尊氏は是と見りし如何様神樂岡へ向
 ひし勢どると覺ゆる山法師なる馬上の懸り心の悪くを
 急ぎ向て懸散せし足利尾張守上杉伊豆守畠山修理大夫に五萬
 餘騎と差をく向らるる楠結城伯嗜ハ辰のころ勢ぞろひして山
 門の衆徒等の神樂岡へひいて息火をせし楠三千五百餘騎と
 三手小ころつと一陣小進し其先陣一千餘騎内五百人の引れ兵は
 て内五百人のかろくろたる楯と作て持せし元來智勇無双の
 名将たるを斯のどく一枚楯ハ輕きと五六百帖長と四尺小剝せ

板の端小懸金と壺と以打。敵の懸んととりとに此楯の懸金以掛
 堀に如く一二町が程衛をなして透間より散々射を敵引に究竟に
 懸武者は出して敵陣を破る術を。中の陣は正成二千余騎の内五
 百人へ打りの兵と勝り内五百人の射手と勝り都合二千余騎を。後
 陣の矢尾別當顯幸志貴右衛門朝氏千五百余騎と二ツふわけひえ
 たり。其うらみめ伯嗜守三百余騎結城九郎百五十騎一手ふ成
 てひくたなり。千種中将忠顯朝臣八百餘騎あて。遙のうらみひく
 たり。捕がうらみがるれ兵先出雲路の邊に在家ふ火はけたり。京勢は足
 利高經上杉。畠山等都合五万余騎是と追拂るとれひひらふ。
 真さな捕れ旗をうらみ見と。進こうひて思慮しうらみ。あといひくた
 る小勢も伯嗜守長年うらみ京家ののりども山法師とかげもるぞ。
 捕鬼神うらみもりの小勢あて。何はれ事とら仕出さへさ。こを

だふ追拂ひなを跡の戦はどして敗るうらみ。五万余騎以二手ふ分
 とぞ懸りける。捕の先陣相懸りふかつく其あいた三十間程あも
 成ぬらんと思ふ時俄ふ楯のかれ金以懸合せけむ目のもうふ一城
 の出来たりが如く小見えけるあぞ先ふ進む京勢氣後れして危む
 所も後の京勢捕が術の早見へけるぞ。最心あかむを唯かやぶと
 とさけんぞ魚二無三ふかたる所を捕弓の兵楯のかげより散々ふ
 くと射たりけむ。京勢少く亂とひらむと見へ。程ふ捕が先陣楯
 と取放ち備は乱して懸たりけむ。京方の先陣五千余騎一度は
 崩して敗走も。正成兵ふ下知して急め追はめけむ。矢尾志貴の
 備と亂さざると跡より進む京勢五萬騎一度も返を事能くさして。
 被討りの二百余人なり。捕熊と長あひせむと兵を引とらう。本の所
 小備と立ちう。謀最かこ。如是せば百もんの勢たり共恐る

に足どと見へくる京勢敵の是計をく見る所小奥州の國司頭
 家卿二万余騎ふて栗田口より押上せ車大路ふ火と被懸り。
 將軍是見く此備の如何様北畠殿と覚ゆるを敵も敵ふをよれ
 尊氏向むを叶ふまどとて自ら五十万騎と卒し四條五條の河
 原へ馳向くと追つ返ら入替々々時移るや被戦りふ足利の大勢
 たるども軍より勢の少くして大将已ふ戦ひくびを頭家卿の小勢
 あして入替る勢を故に諸卒忽ちに疲まける兩陣互ふたぐみ
 屈して念りを押へ人馬の息とほき居る所へ新田左兵衛督義
 貞殿屋右衛門佐義助堀口美濃守義満大館左馬助氏明三万
 余騎と三手ふ分と双林寺將軍塚法正寺の前より中黒の旗五
 十余流差せて二条河より雲霞のごとくふ打田とて京勢の
 真横さすふ懸りより敵の後と切らんと京中へ被懸入けむが京

勢をのや例の中黒よと云程くそあは鴨川白川京中ふ稻麻竹
 葦の如く小打田んごの大勢馬と馳例し弓矢代かたる捨く四
 方八方へ逃ちる事秋の木は葉と山嵐の吹くろろふ異なる守惣大将
 義貞朝臣の熊と鎧と脱く馬ふ乗かくと只一騎敵の中へ馳入々々
 何こふ尊氏卿の坐とて撰び打ふろろ日頃の鬱多ん散ぜん
 とて乱軍の中と馳まらつと伺ひ申さんけきども尊氏運つよ
 して遂めく逢りけは義貞ちる味方とて尋
 ね申さんけり

評ふ曰義貞鎧を脱く馬と乗かえと一騎敵中へけ入尊氏と
 撰ひ討ふ討んと伺ひの事志の武士といども大将の行ひ非ず
 若大勢ふ取囲まんと討れり君の御為あもあ忠心う



正成奇策
當の敵
破る
圖

太平記三篇卷十五下

に似たりと其ころ心ありの申さるる哉

中ちも里見鳥山の人々の儘に勢あり丹波路のかへ追ゆさ敵の大勢
代將軍ゆてや在るべきと桂川の西まで追ひけり敵の大勢ふとて
返さざると一人も残らず討まふなり初を十なりふ分を追ける兵
どもそら小長追をせとて皆京中へ引くけり角て日已ふ暮
ける楠判官惣大将の前ふ来り申さる今日御合戦不慮に八方の衆
と願けしと申せどもさうて被討たる敵も候も尊氏の落すまされける
方とも不知御方儘の勢あり京中に居候なり兵皆財宝ふ心懸
て四方ふ散らして制するとも一所ふ打よると不可有候あるまじ前
の如く又敵ふとら返され度方と失ふ事自定と覺へ候敵ふや
も機と付ゆれば後日の合戦難ざらるべし唯此まゝおと今日引
させのみ明日の馬のあしを休め明後日の程に寄る今一當手痛

く戦ふけりなるべし敵と十里二十里の外まで追靡けていひま
申されけり諸大将實もとて坂本へひき入られり將軍今度も丹
波路へ引んと寺戸の邊追落らさけるが京中へ敵一人も残らず皆
坂へ引くけり聞へけり又京都へ歸り申されける此や
八幡山ざり宇治勢田嗟峨仁和寺々々馬路へかき落ゆさ
者共も是は聞かぬを安んじ我れくと立かたりける入洛の体
そ耻かたき御方と敵の勢と見合されば百分が二もなきふ毎度
斯追ふそら見分りし負とのとら直事あり我等朝
敵たる故り山門ふ被為呪咀故り御方の謀のつゝあき事と云
かまき人々怪しと思えろ心程を愚らさ

評ふ曰楠義貞の陣ふ来り坂へ引く人々をのりと申さるけ
るも理りふことあり明後日の程ふ寄るとりつゝも敵ふ臆

病心の覺さるる前によりせり人と申する所なり御方かあつて
 勝たんとあつ又曰正成諸勢ふありてい軍ふ勝るる時の諸
 士諸卒負ふ思ひとをさへ其故の敵を常ふ十方ふ在
 天下は定むといつても利と利とせば必ど亡べ況や一戦の利有
 とやまれば敗軍れ士卒と剛兵といふ必ど其うらむと報んと
 思ふ故をう敵の猛ま猫とむの味方の窟るる獵とありの比
 然と猛心はりつ猫の圃と出猫れ爪牙と折んと謀る是と勇
 士志士といふ太公望の十四變の兵法何ま怠りと變と
 と凡武士の色と欲との二ツと捨ざるが大利と得がて骸
 骨の野もふ朽ぬとも義の為ふりり義の為ふ止る君りり
 人の仁とめりりといふととと釋氏の禮と専らととと故に禮
 拜恭敬と以て教のうめとと然るふ天下無道のとたの秋氏の

無禮と本と高位ふ居る人け悔り或は位高かるとも人
 の上座ふ立ん事と本意とせり奉行頭人など人の鑑となら
 ん者の智とめりりといふ是非善惡と明ふとと下民女子
 の信と示して其偽りある者の刑罰とめりり教と上ふ仁
 りり下ふ信りり中人の義と智と禮と正しきと無為の世
 とのふされぬ無為の世の武備全しといふ亂世の君の武
 備全かると武士義と知ざる故に今日味方かと思へ明日敵
 ふ加りり今日敵たるとも明日味方ふ與と是義と思へる故
 たり正成ふ於る天下の君は主と義と我任として死生榮
 枯毀譽ふ心を我ふ從らん人此心と能存ト申べ宇都官塩
 治等が心と思へ幾程の命と期と如何なる榮を望らん彼
 等が年五十あり余りぬ人間の一生の過らうと思へるん甚愚ふ

て義をあらうぶる故なり今日敵なきども又御方とあり安
かゝる者なりとのへり

正成遣泣男欺敵兵

尊氏落京都趣丹波

楠判官山門へ歸て翌の朝律僧と二三十人作り立と京え遣
此彼の戦場ありて死骸とぞめさせらる京勢怪しとて事の由と
問けしに此僧ども悲しみの泪を押へて昨日の合戦小新田左兵衛督
殿楠判官殿そのほろ大将七人まで余り深入して討死仕のひ程
み孝養の為み其死かいと求候たりと答て皆々泣きつさる此由
と尊氏始高上杉仁木石堂の人々聞とらと。何を不思議や宗徒の
敵ども皆一度不被討とらと申事と心得ね扱のよみ是れど追
勝軍はあたらしく官軍俄に京を引たりたる此故あるべし。いづれか
其首有らんとらと獄めんと懸大略と渡せとて敵味くこの死骸の中

を求めさせけまども。是こそと思しき首もあつてまゝに余りありま
ほら。此小面影の似たる首と二ツ獄門の本ぬけし。新田左兵衛
督義貞楠河内判官正成と書付成せしけり。何れゆゑとらけ
ん其札のかさつ小似た首なりまゝにけを札のそと車と秀句
とあてて書そとけり。又同日の夜も計に楠判官下部共焼松
を二三千本燃し連させく大なる鞍馬のゆゑを下しり。京中の勢
ども是れ見るとらや山門の敵ども大将とらされ。今夜もくへ
落行げ候へと申しけり。將軍はあもとや思はせり。去る落さぬ
様小方ぐへ勢とけり。向とて鞍馬路えに三千余騎大なる口へ
五千余騎勢田へ二萬余騎。宇治へ三千余騎。嵯峨仁和寺のく造
洩さぬやうに堅めよとて。千騎二千騎と合て置きざり。方もたう
けり。扱て京中の大勢大に減とて残る兵もいづる。用ぞんぞる

の無りたり。去けど小官軍宵より西坂をさうて八瀬藪里鷲森
 降松小陣ととり諸大将の一手に成る二十九日の夕此くみ二条
 河をく押寄たり。先陣の忠頭長年結城九郎都合千五百余人
 二陣頭家卿七千余騎三陣の洞院左衛門一万余騎四番の新田一
 万余騎五番の楠三千五百餘騎を兼く諸大将議せしむる
 此の關のこゑは揚ど火とも不放尊氏が陣しける東寺へ押よせ思ひ
 よらざる所へ乱入して尊氏と誅せんと定らるたりけるを千種殿
 なるまひひ先陣に進まれりるが此卿の大酒好まじきゆへ小終夜
 酒宴して酔まじき故ゆへ生得手の者法のまじきかたに此彼
 小火とつけて時の聲は発しける尊氏兄弟目と摺々むらり周章
 是を見く何事あやと謂まじき直義敵の寄たるをんと申さる。
 扱ひまのよの謀りけるゆへ味方の大勢なりし時たゆも叶は引軍

かり増て勢と大略方々へ分ち遣し此小勢あも戦ふともうの小は
 とて兄弟行こうまじき尊氏の丹波へあげ直義の摂津の國へ落られ
 たり。大将如斯なまじき諸軍勢ありひ丹波路とさして引もあひ或は
 山寄成さして逃るもわり官軍のたすで遠く追ざりける跡小
 引味方と追懸る敵ぞと心得く久我暖桂川違ふと自害したる者
 多くありり。況や馬との具は捨たること足の踏所もたうりり。將
 軍の其日丹波の篠村は通り曾地の内藤三郎右衛門入道道勝が館小
 着の人の四國西國の勢の山ざれを過く芥川あそ着にける義貞京中
 え馳入らんと仕りひしを正成泰て申されり。この忠頭と酒狂人
 が兼約を忘まじき所々小火と放ち開のこゑを發して尊氏兄弟の早
 逃待りたる今はやしけ小思ふとも叶が。所々小分ち敵の兵危を敗
 をふまひえ共如定禪りの有間敷さ事ゆも不待是小暫く御陣と被

召北畠殿洞院殿の御勢とも早々迎ひ静まる間、かりりれば思ふ
 様も働くまじくと申されけし、義貞實もとて一万余騎、七手分
 て將軍塚の上小陣ととれり。正成の三千五百騎軍と三ツ分て三
 条河原小陣せしむる。去は此度の合戦、小所々より集る首凡七十三
 百余虜二百余人たり。前代未聞の事あり、後代亦有きとも覺へも實
 も義貞正成討と又山門の敵の落行ぬと油断して居る者どもなり。
 殊小知の上刻の疲まする者ども、のよ寝入る時、ふふ押寄なき討れ
 しも理あり。又所々へ落人留とて遣はる軍勢、山門法師を其邊の在々
 所々皆山門の領たり、るる所の野伏どもと一ツ成と討し程、遁る者
 の稀、討る者多かりける。所々あつ討まる者千余、志賀の閻魔堂
 此前ふかけらまらり。又虜の中、小尊氏の丹波へ落りひたりと申りの多か
 り。正成明日義貞頭家二人の内、一人丹波へ御むひひ、正成先

陣仕りり。又摂津の地へも一人御向ひ候へ、勝不乗と死あけるを
 追にあらざと云る事、是にりり、今日軍勢と休めて明日郊の刻
 より立と義貞丹波へ打てぬ人。正成先陣と申、義貞實もと申さる
 くと大江田里見の人々、義貞が兵とて、其身金鐵ふあらず、皆疲ま
 るも、は敵も疲ま侍りたる。勝不乗とて追詰て可討敵、不討して
 置時の敵とてかへりて又強くなるもの。然る此、上下此苦勞皆徒事
 とたりぬ。諸卒の疲ま、少の勞、尊氏とるの末代の善事、少
 の勞と苦ん。末代のせん事、捨んやと申さる。新田此人々、仰尤も
 候へども、糧たりとある。楠三日、糧と用意してり。各の初、此働
 さあも、三日の糧、を給はる。御不覺、あては某が勢の中、あ持ぬりの
 いたる、いとい、夫の御國、近ふと云と、丹波へ寄んと云者なり。

頭家卿へ申さるる尊氏節度へ新田ふあそのひなき頭家の朝
 の御大事なるまじと上りたる計りたる義貞向むべき事やと宣
 たり又義貞去る十六日の軍に船田入道と計せしるし申さるる一萬
 餘騎の小勢を以て百万の士と破るの條無類に良將たり旅泊のほれぐ
 成も慰さあかすと勾當の内侍と下さる此内侍容顔羨麗なる事唐土の
 揚貴妃漢の王照君吾朝の衣通姫小野小町も面と覆ふ計りの羨人なり
 けまばさしも智勇兼備の良將たる義貞も心迷ひて一夜の別まとも悲
 しめり是あや心の引とらん尊氏と不追其夜も都に在よりあて疲れを
 休めぬふたんと云さる忍びと東坂本ふかさをしけること扱まて京
 都敗軍の將士の親子兄弟主従互ふ行かざるを知む落めきりまは討ま
 くとぞ死しつゝんと悲しむ去ども將軍へ別下なく尾宅の宿成過させ
 れひびと分明ふ云りの有るまは兵庫湊川ふ落わりたりたる勢の中

より丹波へ飛さるやと立ち急ぎ摂津へ御さる勢と集めて京都へ
 責上らんと申さる此とれ直義も湊川は落とまらんと居らるる依
 て將軍二月二日曾地を立ち摂津の國へぞ越りひらるる摂津の北に
 山々の楠城々と嚴敷構へて通るべき様なりとて播磨へ廻り三日の
 夜もんのり湊川は着ぬ其勢八千餘騎なる此とれ熊野山の別當
 四郎法橋道有が末ふ薬師丸とて童形あて御供したりり將軍呼
 寄る忍びやふ仰らるる今度京都の合戦も味方毎度打負はる
 事なりと戦れ咎みわす情ことの心と案どるふ只尊氏ひとて
 朝敵とる故なる去ば如何あらして持明院殿の院宣と申賜る天下
 を君と君との御争ひに成て合戦致さげやと思ふなり御邊へ日
 野中納言殿ふ所縁ありと聞及べは是より京都へ歸り上て院宣を
 伺ひ申て見よしと仰らるれば薬師丸畏まらるるけりいとそ



太平記三篇卷十五下

正成が計
尊氏丹波へ

北へ
図

十

三草山より暇申て則ち京へぞ上りける

泣男杉本が傳

傳ふ曰古へ正成千劔破ふわう〜とき松原五郎とて正成が家の子あり来て申々〜侍一人御扶助〜と申と楠がうぞ藝ありやと問松原が曰藝へたり〜人ども能泣けと申と歎と如何めと尋らう松原が云此の今やも一歎泣く見せよと所望つらまらば即刻涙と流〜わのこふ歎とい正成夫とて世ふ稀なるものなり尤様の事入るとありとて即對面〜て歎きて見せよとて被申々〜と涙流〜とぞ泣ふたり實ふ珍ら〜事なりと扶助せ〜れり世の人わが笑て楠程の人れとも〜童敷事のいあの泣男の歎〜つとを二げのとて抱へ〜を心得ね泣〜何条藝た〜と〜の傍の人の同

〜嘲笑〜て藝あてもあ〜るの泣男泣〜と見〜我々も亦被泣候其身の泣〜やともわは傍の人まで泣せら不思議の藝た〜と云バ又或人の曰其身一人泣〜ん忌々敷ふ人追ひ泣〜事最不吉なり〜と取々沙汰〜下も楠の〜取わ〜必む用の事〜ん〜其育孽の人と〜人合ふ随〜世の用事と成況や人の勝〜る藝と持〜とや〜とて扶助せ〜れり去〜今度の戦ひふ京より歸て其夜半頃より楠義貞の方へ行〜對面〜傍の人と除〜れり人申談〜んとて義貞ふ密〜被申けら其明日僧を仕〜て今日の戦場あて泣〜せ〜然〜京勢怪〜事の様を問んふ僧ふ謂〜せん様〜是の楠殿ふゆ〜の僧は〜侍が昨日の軍ふ楠殿の天ふ當〜て被討のひたりと申〜を新田殿北畠殿も被討のひ侍る御孝養の為よその死骸と求〜と申て常々楠が情深かりん

と云語て歎くべし残の僧もよみ數ふべしと申付りぬ日本無双
 の泣上手あてありき泣ひて然らば人の愚うき忠節顔ふ成て
 尊氏兄弟ふ語りし尊氏兄弟の物忌深やて最愚うき人あれと
 實と思ひて手の者共ふ云聞せて修りなん又夜半過る程ふ下部共
 ふ申付て焼松二三千も焼く連て四方の嶺れ道々行りぬ東寺
 より是と見てとら宗徒の者共が討きたるふ依て落行あ人討留
 たりとて所々へ兵と分らん其跡へ御方一手ふたつを押寄ふ尊
 氏兄弟と討事案の内よりと申されたる義貞由々敷御謀ひ去
 かり其泣男一人こそ泣め自余の僧の何事ある歎きたる最れ
 かろふとと被申ければ捕まると上傍りの人彼が泣くを見れば
 自らも泣きあて皆泣ひ義貞不思議の男を御扶助ある者なりと
 ぞ申さるる夫より諸大将達も此由と談ぶて宿所ふ入り泣

男に此と申聞せて此謀なりるば汝を所領一所の主とて本
 べしとたり又僧の作法の和殿の知るまふければと傍りちかき
 里ふ律僧ありけりて請ひて深く頼むる戒法ふ背き侍り
 たりとて不受其僧とて禁籠りて我が宿所にと置きとる意は
 此事漏さんと思ふあり和尔の傍りに律僧のありたりに矢尾
 比別當と遣はて密に頼ませりる捕被討ては尸骸をとつて密
 に葬と仕度ことあてひし申々とい僧實ごと心得て甲斐々々敷
 被頼り歎男の大敷そとてと誓ひたり彼僧の弟子も成
 如何あも隠しと三四人あて昨日の戦場ふ行りり彼男道々僧ふ
 語りりる新田殿も討死とも申痛手負ふとも申はとる事
 語りり行あて僧もあはれ日本此名将あて渡らせりみりとの
 てそふ袖とてぬしけり戦場ふいりり泣々死骸を求る

昨日敗軍れ兵其主と討せ子と討せ親に討せたりもの多かれ
 は是も死骸と求めたるもの多し彼泣男の最ありし小人は勝を
 て歎にありしも怪しむもの多かり左の可隠事ありし
 不待とて泣く三人被討り下りて語りけるゆゑ聞人皆泪と流
 たり即時に此事尊氏小聞へりしは近習の者ども偽りて死骸
 と求る躰少て泣男は此由と尋ねりる件の由と結るは向し者いと
 ありし覺へて泪と流りる求まざる夫と思ひ死骸なり日
 の暮ぬとて僧と先へく彼歎男杉本佐兵衛の跡は留て京中
 小入敵の躰と見て歸りりる小正成の首義貞の首とて獄門よりけ
 て札と立てり歎男是と見てわろく思ひて矢とてとり出し
 秀向仕と是と書付亥の刻は坂本へ歸りりる正成は此よりと結る
 には仕負せりて焼松の謀りて翌日の郊の刻は押寄りり

又猶無心元や思ふも人足輕の兵百人たり勝て落人の体よ
 かり勢田小原へ五十人づ遣りりる方々伏兵ありと申
 扱はりしつひなきとて本文の如く押寄らるる

宇都宮重耻降官軍

正成智辯述必勝謀

去程小尊氏湊川小着申されりる機と夫ひつる軍勢共しりるは
 直りて方々より馳集りりる間程う其勢二十萬騎に成にりる此勢
 ありて頭責上りりるが又官軍京ありなるゆゑありしと湊川の宿小
 其事となり二三日を逗留りける官軍あり顯家義貞の兩将事は
 左右もとせり丹波攝津へ發向無りけり正成は落し手勢三千
 五百余騎りて山崎より發向し八幡小恩地左近太郎より一千余騎を
 楯籠りたりし尊氏下知りて武田式部大夫小笠原孫八下條
 上條等都合六千餘騎ありて十日中を攻りりるふ人の討せ

て城の少くも弱らむ去る二十七日より正成の下知として楠正氏恩
 地と助よりして和田正遠ふ三千五百騎とさし副へ洞ヶ峠陣と取
 らしぬ正成の晦日は山崎へ着明日へ一日兵と休め二月二日小矢ありせ
 有べしと披露して晦日の夜半計りし松明三千針り燈り達る飯
 盛の城より山崎の陣へ勢の加ふる体よ見せけり是例の野武士
 等楠正下知し隨て斯成せりある武田小笠原の者ども城へ強し追
 んと欲せり小道ありて翌朝日小降人ありて出たりし楠山奇へ
 着し夜八幡の奇手と追拂ふべくも尊氏敗して誰と頼と
 無し今もや城と攻居るは尊氏より下知りけし討死と思ふを
 らん扱ひ御方よ成したるに始終の味方なると思ひし一ひ蒸た
 ると果して降りる宇都宮公綱も中途より引かむ楠正成の許へ
 密に使者と遣して申入りし先年南都の陣營より都小降参り君

恩に下れ身命と續侍る事何ぞ忘るべきや今度東國も於て敵小前
 後以囲まれしを滅亡せしむる故に暫く命を全うして重て忠義
 と盡さん為一旦尊氏へ降参り侍る此事御免許あり御方よ泰く
 先非と補ふ先年貴殿の吹擧めより処多し今又貴公の一諾と
 待りのありと一言遣しけし正成使者小對面して子細いし早速
 可被馳参事公私最ふ覺多し天氣のよ正成も可被往とて使者を返
 されり和田思地申りし宇都宮が事武士の法よりし如此不義の
 りの御方よは重ての軍も亦手足もいと成て御方互ふ心と
 かくて大なる難し侍る不知出向て我等卒に行跡とて討取て
 軍門も首と切りけりやと申りし正成の曰和殿原の流は氏伺ふ
 て源氏も宇都宮の英雄の士なり然れども文字無し義ふくじ
 故も如此の行いあり伊尹の大賢とて殷王の小善と悪とて去りし共

夏王の不善と見て又殷ふ歸を。韓信の英雄れ士あり。項羽諸將と侮
 る故ふ去く高祖も服す。是將の是非もあらず。主の是非もあらず。伯夷叔
 齊の賢くして餓死せり。宇都宮何を賢くせん。天下草創の時守文れ
 難き事と君敵慮ふけり。尊氏義貞の兩虎耳。以て服せり。
 天子憍りあり賞録正しく。政道全に時。藤房去る。藤房さす。
 びて天下の恨も有べし。天下の士恨を。時行自然ふ亡ぶ。時行
 自亡して大塔宮と以て天下制伏。禁闕の守とせ。宇都宮が輩の禁
 門の警固よび。誰が為め降人とせん。是と以て見が罪彼ふあらず
 正成が如く弓矢は。者へ敵の鋒も死と輕ん。和殿原の英雄と成て
 後世も功名も立ぞ。宇都宮が事先日。善て思ふ儘も殿原も物結り
 ち。是の事と忘る。のうと申し。是れ。和田息地も感涙と。な。して
 正成の。人。立。諸卒に。して申す。主人の智謀仁勇の徳も。太

公望張子房の地位も達し。恨も。哉子路。志有。人の為小肉
 以。傷ら。か。と申ける。又八幡も置れ。武田式部太輔も堪へ。の
 降人。小成り。其外。此。彼に。隠。居。り。兵。ど。も。義貞。も。属。し。六。官
 軍。弥。大。勢。に。ろ。り。龍。虎。の。威。と。振。へ。捕。り。智。謀。も。と。り。御。方。の。兵。仗
 損。せ。し。て。宇。都。宮。武。田。小。笠。原。等。の。もの。も。降。せ。し。こ。も。良。將。ハ
 不。戦。し。て。勝。し。し。此。等。の。理。あ。る。又。正。成。ハ。悪。て。敵。の。敗。軍。と。計。り。て。松
 浦。櫻。井。深。谷。れ。三。人。を。大。將。と。和。泉。紀。伊。攝。津。の。兵。船。百。八。十。艘。と。集。め
 軍。勢。二。千。五。百。騎。と。以。て。兵。庫。を。燒。て。上。其。烟。と。見。ば。敵。兵。庫。へ。集。る
 猶。細。々。と。謀。を。授。け。正。月。二。十。八。日。に。打。立。せ。り。案。の。ど。く。直
 義。ハ。京。都。に。没。落。し。攝。津。の。國。め。て。落。集。り。勢。一。万。斗。り。に。て。陣。を。取。り
 在。り。と。楠。が。兵。二。月。朔。日。の。未。明。に。和。田。岬。の。東。西。より。上。り。軍。兵。二。万。に
 備。へ。兵。庫。の。宿。も。亂。入。し。関。を。閉。ぢ。火。を。放。つ。深。谷。ハ。兵。船。八。十。艘。軍。勢

一千騎少く和田の岬にそとく人必堅めたり。直義が兵ども昨日の軍も臆病
 神の覚ぬ者どももさう思ひもなき事なれば途方と矢ひ散々北散り
 て直義も百騎斗りゆて摩耶とさうてぞ退りまはる。細川清氏ハ楠
 勢引峠ると付幕つて討取んと。有合兵五百騎斗りゆて追懸し。楠
 楠が兵二手ぬ分まてるは一手づ互ふく合せ戦ふ間に一手も三
 町はくり引兵と立まば亦一手ひく支三町程たり。細川も舟又乗ん
 處と討んと敵久せば矢軍に時移る。斯く和田ふ至る時ハ清氏が
 勢も追々ふ馳えたりて二千討ふありたり。然るに楠が勢最初より
 和田の岬ふ備へたる一千騎入替り。防矢と射て兵庫に向ひ一千五
 百騎と静ふ船の乗らる。其ゆいと西宮の渚一面に立たり。中成
 ともと深谷が一千騎一もとよ洲寄へ引たり。清氏は追て討ん
 ととこれハ櫻井松浦の兵船ハ兩方より散々射る故只引行敵ハ見

物してぞ居たり。楠ハ先日敵軍敗北の日より忍びの兵と丹波へ
 二十人。摂津の地ふ二十人北る敵ふ交て遣り。乃ら尊氏摂州へ
 至る近日まじく京都へ攻上るより申けは。楠京坂りて使者ハ
 遣して尊氏已に上京のより申候。諸大将達兼て摂州の邊より出合
 て一軍仕り。度々申入るりければ義貞攝津北國ハ楠が分國ふ
 まて定て可静尊氏又返り上る。何程の事可有と。延々と申さる
 顯家卿ハ新田が傾城ふ迷ひ。かく謂条非良言尊氏返り。定て大
 勢めてぞ有らん。可差置み非らむとて。二萬五千餘騎少く二月四日
 に都を立て山崎へ着り。此儘頓て摂州ふ突向せんと宣ひし。楠
 押止り。最早遅くは去る朔日の頃も侍らん。和殿新田殿摂州丹波
 へ御向ひ。尊氏兄弟ハ亡びる。此國と御と。候条今ハ尊氏
 又大勢少く先日の恥と雪んと攻上り侍ま。以前某が申す。敵ハよ



豊嶋川原
合戦の圖

太平記三篇卷十五下

十七

こころいひ。今少く近より侍る時分謀以て戦りし勝事わんの内ふ
 在りるんと申されば、顯家卿并伊達信夫の人々是れ同し。新田の人々
 是と聞て北畠殿御向ひつゝ上一定合戦有と覺えは御向ひと申
 たり。されば義貞五日の夕の刻は坂本と立て同く午の刻に京都に立山
 寄へ著玉ひり。捕軍ふ怠り有糸無謂と申されけむ。新田の人々尤に
 こころと心有し。被思ひ。即軍の評定つゝるに捕爰は有と戦バ謀
 わりたり。其故は尊氏が兵先日の恥と雪んと上下いさゝ進むるのわり。又
 御方の強き事のと謂て恐る者わり。承りは定て進む兵は引立
 られ。上りる人又新田殿御下向よりとて敵の上下私語事無限由申
 候。尊氏兄弟の敵は逢人所由と存て上りる人。枚川の邊より來り
 たり。敵は如何計りのことあり。不出合と謂ていぶ。き事思ひ所
 へ夜より曉り夕の刻は寄りひ。新田どの枚川へ寄りひ。顯家卿は北

の山は傍て敵懸り。こころは横合ふとわたり。其の宵より枚川の後に
 山は攀て兵と伏せ新田殿の時れ聲ふ敵陣の周章なり。所へ落し懸る。六
 尊氏兄弟の内一人のかり討とて置べきや。謀細々と申られ。顯家
 の卿は最と同日。義貞と尊氏兄弟が師とて拙る。夫までのことは
 有る。候行合々。所す。馳向て打ちして捨侍りるんと事も
 かなげふ申され。桶明日の摂津へ御向ひ。と問。義貞言。多
 及ぶ何条事の可有と申。御向ひ。於て運の戦ひ。勝負
 は不定。某が申所。定なり。定の勝と捨。勝負不定の謀と仕り。不
 心得。去た。ち。留め可申。非。其存る。右の通り。に
 候。義貞御向ひ。敵の義貞寄り。と見。要害。前。み。ぞ
 侍らん。然。御謀有。事。申。義貞不用。六日の末
 郊の上刻は二万余騎。山。立。顯家卿。辰の上刻は山寄

以立る。將軍此よと聞てよは行向て合戦をゆせよとて舎弟九馬
 頭も十六万騎とよそ入と京都へぞ被上り去りて小両家の軍勢二月
 六日れ已、尅よ端々豊嶋川原あぞ行合ける互に旗の手を下して東
 西小陣と張る南北に旗以屯と豊嶋川原の乾より巽れ方へ横たせり。
 直義河原の岸と要びいとて十六萬余騎あぞ扣えられとて奥州此國
 司頭家卿八十餘騎あて兩陣の間岸高く人の上るべとやうもたつり
 たり處小鶴翼に開き合せんと進せれり所小直義かきより落しかけ
 らとて故軍利あぞと引退る。凡高山あぞ向ふとけり鶴翼の備へ
 然るべからん小一町半町れ垣々々向ふ時嶮岨々々悪し。そのゆへ
 敵の懸引自由なる故なる。此時若南小續さたり山より人數と廻り
 けとて先の方勝利得べきに案内と知らるるあや其術よ及ばざれば
 非なる。よと案内以知べき事なる。宇都宮二番ふはけり引退き。

三番小腰屋右衛門佐義助。江田大館里見鳥山へ替りたり。敵ふは
 仁木細川高畠山と相戦ひし。唯矢軍のよあて互ふ太刀うち無
 して。其日の暮にたり。兩方小石以集りて積るる。今小在飛礫と
 も擲たりと見えたり。

豊嶋川義貞戦直義

正成進大破足利兵

明まげ二月七日先陣の結城上野入道伊達正弘信夫盛平都合五
 千餘騎たぐ一手ふ成り向ふ。二陣の秋田城之助鳥海三郎由利金澤大
 山南部都合六千餘騎。これ只一手みりて進たり。三番の顯家
 卿八千餘騎をり。豊嶋川はうの大河あぞわざれども向ひの岸高
 く人の上るべき様もたつて。城の如くたつふ道一筋開きたり。斗り
 たりと責上らん道以追越んとて被進り。直義の方あ仁木細川
 畠山先陣あて四千餘騎。二陣の高上杉六千餘騎。三番の今川荒川石

堂赤松七千余騎四番の桃井佐々木山名五千余騎五番の十町退て
 直義八千余騎なり。官軍已小川と渡して懸上らんとあさるりりふ
 足利かくゆの強弓の精兵は岸に立ち透間をたぐ。さぐり射より
 けは官軍射立られて失度路ふたつと進み得ど。仁木義長これと
 見て八百餘騎を懸りりり結城伊達信夫の者ども大勢討せ引退
 く。二陣ふ扣へたる由利鳥海入替て進みりり是も同く大勢討せて浮
 足あどたつたりり。宇都宮公綱の千餘騎顯家の後陣ふ扣へけり。わ
 ち打破つてまのせんと國司の陣れ前と馳通り。魚鱗ふかつて懸りりり。
 細川清氏義長ふかたつて此敵と請とん。散々ふ是は討せ清氏真先
 ふ進んで。宇都宮の人々と見て侍る。先陣ふ進みりり細川清氏あていぞ
 や。見参せんと聲々ふ呼びせ懸へりり。宇都宮あはへて支へて手負
 敷と不知りり。高師直これふ機と得て軍使を立て。只懸破りて追散とん

いと申りり。仁木細川後小新田のわら手有とてみりり。遠懸は
 はせりり。義貞急小軍使と立て。顯家御へ申されけり。御勢疲とて
 見へ。義貞新手を以て替り侍りり。望とけり。顯家則ち攻めんと
 少引退りり。義貞二万餘騎と七手ぬかて。立ちりり。大館氏
 明六百餘騎江田行義八百餘騎。二手にかつて。入替々々戦ふとつとん。
 手と負討りり。手りみて。已ふ引色あを成りり。爰ふ楠判官正成と義
 貞より先ふ打向とる。事りり。不被謂義貞の定の勝を捨
 て不定の出陣と致し。候事最不興し。不進して。あつりり。弟の正
 氏来て。あつりり。仕て在りり。自定前。少の軍の有る。よ人の事
 と宣ふ人の危様。少御座候。新田殿の二れ前。めて侍ると申りり。正
 成。と耻しげりり。氣色にて。最めて。後馳せ。打出申りり。け
 ち。午の刻。手りり。ふなつりり。其勢六千余騎。軍と五つ。小分なり。先陣

八尾別當顯幸八百余騎四番の正成三千餘騎五番の正氏六百余騎あり。道めて手あひの死人と昇助けて。都へ上る事敷と知ら。正成との子細と尋問して九見つる事上。某が先陣の道手の軍あけ向ふらん。神寄より南の濱へ打出て敵は北小見するや戦へ去らざらん。此ゆて兵と備下して。芥川一里けり行過て兵を暫く休足させ。腰兵糧と遣せて向ひける。自身遅兵三十騎奉りと勝て先陣忌地が勢よ加わりて進ましける。戦ひ疲れてる官軍捕が旗は見え。機をとるな。矢の時の聲を發して引返と。義貞急よ軍使を遣して。正成の兵是へより一人一所お成て戦わんと。國司も同じく軍使を立て。角のごとく申送らせらるに正成も又軍使を以て返答申されらん。其口より御破りわらん事。百万の軍士少ても難叶存の相構へ。夫より兵と進めり。某が分國に

て候へば當國の事案内より知らる。今見り人敵と追ちりて御見さん。み入侍りやんと申遣してけり。諸軍勢よく色と直して進んと勇まけり。正成の南濱より廻りて不意に直義が陣のうしろへ出矢一ツ射ちかあつとぞ見へける。正成真先小在て。すの懸とぞぞ下知せし。たり程小先陣の大。恩地左近太鼓とらつて直地小直義の陣をりけり。破る直義の八千餘騎暫くもなすり得ど。さうんぐ小亂くひて崩れ小崩れとて敗らん。大将の陣已小如此る上は諸陣とても休へ。皆我され少と逃出と。義貞の兵これを見と。けり。程をり。これ先陣二陣を亂して進め。頭家の卿も同じく三軍と乱して進。三方より追とら。困んで首を取と。千六百三十餘級あり。其内九百八十余級は正成が手へ討とら。正成兩将小對して申されらん。義貞朝臣へ進んで西の官は陣とら。頭家卿は摂津の府は陣も正成と

尼ヶ寄ふ陣して都合その兵五万余騎尊氏今ひと泡吹し申へと
進めりつゝ義貞今朝敵何となくとも降参し尊氏ハ自亡るんと
都ふ歸らんとて既ふ上京せんと仕りひつゝと楠其言とえしと申つゝ
此儘朝敵は追捨てかゝりつゝ朝敵まこととてうけなん事無疑去
は先日朝敵都を落しりし時ついで追つゝ尊氏ハとてとて亡るべ
りしと續ひて追給へざらに上つて尊氏又數せん騎ふ成て都へ乱入
せんとも所なく此程の事ハ如何なる愚將も知る所も候況や義貞
ふ於てとや然もども此頃ハ内侍拜領しつゝ依て暫時の別を物
らき事ふみひり故や京中ふたゆも居りんと忍びく坂木に在
て病と號して諸將は對面とて仕り守先日又朝敵艾川ふ著なり定
く可勝謀のほとも用ひ不給自定の勝とて今敵の堅陣ふおしとせ
多くの御方と討せ損成りつゝ過急の勝負と好むりつゝ専ら坂

本ふ歸らんと思ひつゝ所ふわり今亦追へ朝敵は追りつゝ上京と宣
ふも御心の坂本ふ歸りつゝん為るべし世ハ尊氏ふ被奪りつゝ条無疑
大将の女色ふ迷ふと亡國のけし世の為君は御為めて心ハ心の内ふ存
どる所旨趣と不殘諫言申所なり人の知らずと思ひつゝ世の人皆
智恵わり御一代ふ不限新田の何某を美女ふ心迷ふて軍ふ怠りつゝ去
けれつゝん事當時指頭のゆゝいと受り耳ふりつゝ後代まであざ
りつゝつゝ兼てハ又殿御一人の御覺悟よりと天下れん民と苦
しめりつゝの過ちわり思召と改めりつゝ朝敵退治の事と御心ふ可被懸
事ふりつゝ言ふ不隱述らるるなり義貞實もと思けりつゝ氣色さ
りつゝ頭も諸人の聞所も最耻りつゝ御在りつゝ楠殿の宣ふ所深々教
たる事や事實ふ不宣何条某女ふ迷ふんや尊氏がわん限りつゝ
追詰て討てや置べりつゝ其日則ち西宮も進め被申りつゝ

正成再進破足利兵

尊氏敗走落筑紫

去程小新田左兵衛督義貞西の宮小陣ととつて遙小澳と見り人ば。
 大船五百餘艘順風小帆吹揚て東とつて行わり何方小属とつて勢
 小やと見り處小二百餘艘小楫と直して兵庫の鳴へ漕入る。三百餘艘小
 帆吹いて西の宮へぞ漕とせたる是ハ大伴厚東大内女将軍方へ上
 りたりと。伊豫の土居得能が御所方へ参りたりと漕連て昨日より同ト
 湊小泊りたりと。今日ハ両方へ分と心々めぞ着たりたり土居得能
 ハ義貞小對面して今日の先陣と申と義貞數日船めて疲とるひつろ
 たり。三陣小備られりと申されたりと土居得能詞次そりへく船小我ら
 が家の物めてりく少くも疲とる事不待為家有面目小似て候へ先
 陣ハ是非我等小りひり今日新手めてりと申せば義貞此上の免も
 角も各のりりひたるべしとを申されたりと楠ハ夜半小尾ヶ崎と立

まご郊の刻小西の宮小至り。昨日の軍小速く参りたる上顯家義貞ハ
 兩勢皆昨日終日の戦ひ小疲と申されたり今日小於て其先陣と被申
 たり。義貞土居得能の望とあり故小先陣と参らせたりと如何と
 申さる。楠荒手の先陣御所望ハ義小當て覚然ま其ハ二陣小進ん
 と申さる。依之土居得能三千餘騎と二手小分て土居ハ一陣めて千七
 百余騎二陣ハ得能千五百餘騎めて進め。三陣ハ楠正成先陣小七町
 退ひて進む和泉河内紀伊の國ハ勢馳加と八千餘騎軍と分て備る
 事七ツ。先陣ハ多田の院の一族湯川庄司千五百餘騎二陣ハ舍弟正氏
 紀伊の國ハ勢少く加て三百餘騎三陣ハ思地左近太郎八百餘騎四番
 ハ志貴右衛門六百餘騎五番ハ判官正成三千餘騎六番ハ八尾別當顯
 幸八百餘騎七番ハ和泉守安間入道願一手小成て千三百餘騎
 何とも魚鱗小成て進さる次小八町と退て新田左兵衛督義貞二萬



尊氏
兄弟
筑紫へ
落敗
諸兵
走亡
高



太平記三篇卷十五下

九四

余騎軍を七ツ分らして。先ハ武田宇都宮一手分らして三千余
 騎二番ハ大江田兵部二千余騎三番ハ江田大館小笠原の者とも
 相加て二千五百余騎四番ハ服屋義助三千余騎五番ハ義貞七千
 余騎六番ハ由良長濱一手分て三千余騎七番ハ船田長門守と大
 将とて手勢八百余騎其外菊池松浦の者とも諸國の兵とて六千
 三百餘騎なり。後陣ハ八町河退て奥州の國司頭家卿千葉結城伊
 達南部千福金澤鳥海田村由利會津白川白石信夫岩城相馬
 真壁の人々一勢々々引分々々軍と備ること十六隊なり。次第と守りて
 四方十里分ち支へり。時小楠申りるハ敵生田の森と先陣とて支へ
 ば無左右難破然もとも義貞播磨へ廻りたりと兼々約束したり。小
 案小相遠して敵小清水の邊小出合たり。正成後陣軍使を遣
 して敵小清水の邊不備なり。必定今日の軍ハ勝ぬべしとて通る

尊氏の方ハ大内大友荒手る。今日先陣と仕り人頼存とてわり
 けし。大内大友我等ハ遠國の者ども。京近ハ國の事不案内。あ
 候へども。仰と如何背こ申へ。なれが先陣可仕いとて申り。在合ふ
 人々不進。大友が御返事の申様なり。とぞ私語り。因茲て先陣ハ大内
 大友三千五百余騎。只一手分て向ふ。二陣ハ仁木細川の人々一手分
 て七千余騎。三番ハ高家の人々一手分らして五千余騎。四番ハ山名一
 色土岐佐々木一條板垣下山の人々八千餘騎。五番ハ石堂上杉畠山
 挑井一手分て三千余騎。六番ハ直義八千余騎。後陣小支へ申さ
 せ。巴小清水邊小打出。己の刺成ぬ。とて敵の旗頭。そ
 見え。二陣の備へ例の菊水なり。諸軍も。進む。陣中色め。渡
 して周章。楠の二十騎斗り。御方此足輕の兵に
 打ち。敵陣近く馬と懸。其形。見渡。土井得能。中

けりあはれ見り。敵の陣の備不全候御邊達魚鱗ふ成て懸入り。敵の陣々多しとて。よも怵へし。其故ハ備へ揃はざりて旗色おし。諸卒浮足不見ゆり是破るべきの二ツなり。又兵の聲喧し。昨日の負軍の臆心未離が故之是亦破るべきの二ツなり。先陣より中陣騒し是破るべきの三ツなり。然も只今かゝるべき圖なり。敗軍の色静らぬ先かゝりぬ。其備へ不亂續さざり。後の必ぞ心安く被思ふと申す。土居得能も尤も感づる。楠本陣ふ入り相圖の太鼓と打たれば土居得能魚鱗ふかつと急に進め。楠多田湯川と先立て少しも軍不亂進とて。義貞も先陣合戦始り。是れ備と不亂進せし。大友大内が陣周章騒ぎなかり。少しも持て見へる所へ土居得能少しも擬議せし懸りて切崩し。少しも

大友大内が兵四方八方へ乱れ散る。後陣も備へる足利勢と楠。と言程し。わし笠符をかゝり捨旗と巻て北より。土居得能北の敵少く目とけず。直小直義が陣懸入り。楠が兵ども人れ散りたる敵と討の高名ふり守。結句法と破る過ありと。北行の目と懸る者も。多田湯川のものども兵乱して追詰が首と。直義の楠とて鬼神あり。返せと四方と。下知せし。既ふ土居得能の兵馬前ちり。切入ける程。直義不怵。馬不打乗り兵庫とさ。北らるる土居得能兵乱して追詰々々敵討と。楠の案内者る。敵を受て返し合と。岩山の有ける所。龍近太郎は仰て。北らる樵夫の道より上。歩立ふ。りたる上の嶺より弓の兵と半下して北の敵を射せ。足利勢

返し合はる事も不詰し千度百とび戦へども御方の勢軍一たる
 有さぬ見る事も叶はざれば尊氏も恐怖の體に見へる所へ大
 友参て今の如くあて何とて御合戦利あるべしとも覺へり幸ひ
 小船ども數多し一先筑紫へ御開と有て然るべし小貳筑後の入
 道も御方あていられ九國の勢多く属参らせり。頗て大軍と動り
 して京都へ上りり何程候べきと申けし尊氏實もと思ひ
 是より懸て大友が船あぞ乗申されり。諸軍勢是と見るよりとらや
 將軍を御船に被召て落させり。程とて取物もとり敢
 を乗めり。とと騒ぐととくども船に僅ふ三百余艘なり乗人ととら
 人の二十五万騎ふ余ま。一艘ふ二千人なり。乗たる大船一艘乗
 るつと一人も残らず失ふり。自余の船ども是と見て左の一人とれ
 せとと艦と解て差出と乗後まける兵ども物具衣るいと脱ととく。

遙の澳ふ放ぎ出て船取つんととれは太刀長刀あて切落し櫓城あて
 打散と乗得じりて渚ふ歸るりの徒ふ礮うつ波ふ漂ひ自害とらり
 わるは降参とらも多うける其外乗後まける勢は義貞頭家の勢生
 捕まなましく逃まて兵庫の宿ふ入んととれは正成渚に陣備へ一
 人も通さず生捕り。されば尊氏の卿の福原の京とて人被追落て長汀
 の月ふ心と傷まら極浦の波ふ袖と濡し心づくし漂泊し。義貞朝
 臣ハ百戦の功と高うて數万の降人と召呉て。天下の士卒ふ將とて
 花の都に歸り申さる。憂喜忽ちふ相替つと夢現の世と成小ける
 主上從山門還幸京都
 義貞義助昇進官位
 されは尊氏卿戦ひ負て船あて落らまければ義貞朝臣翌日八日上京
 と定められり。正成驚て申されり。尊氏船あて落たりと士とも其
 落着の處と不知。中國西國ハ猶皆朝敵あて侍らんむらむ。今臆病神

の退るぬ内小備前備中の方まで御發向わらば中國九國の者どもも
 御方あそ参りひり北島殿と云は是より都小御あへ在る義貞の御
 向ひは某御先と云は仕るべし其上軍勢の糧の船も某送り参らる
 べしとわりぬれども義貞不随先上京して後ふりて又下りひり
 返答と正成重て申されりる中國の所々深山多しと國の者朝
 敵となりる亂入せん事なりが覚へ今二十日北滞留少備
 中の方まで御下り有て御上京しと進めりども義貞も是程
 ふるるる人の落人となり者ふ誰り與侍らんやと申さる楠云君は
 御政道と不恨兵の左もわらん今日日本の士過半朝敵と云る事
 さらん他
 ぶらり。當今の愚らるるをばくく加様の時へ武とめつて威と
 諸人成随ゆると古今の良将善とする所あり。此度御上京わらば西國
 の御下向延引仕りらん然らば西國の朝敵も與し申べし少くは御方に

志と通ぶる者も強小属して敵となる者ふ曲て御下向われと申
 されんども義貞終ふ不受楠諫かきとさる正成ふゆりり中國
 小下らんと申と義貞先上京りる西國下向の事十日と延間敷
 ぞとて弥上京と定らるる去程小主上へ去月晦日逆徒都と落し
 二月二日山門より還幸成て花山院と皇居小成されり。同八日義
 貞朝臣顯家卿楠判官其外の諸大将豊嶋打出の合戦小打勝て則
 朝敵と万里の波小漂りせ。同く降人の五刑の難と宥めり京都へ歸
 りり小事の躰勇々しくぞ見えり。其時の降人一万余騎皆本
 の笠あししの文と書直して着りり。墨の濃き淡き程見へてわ
 した知らまらる故あや。其次の日五條の辻小高札立て一首は狂歌
 とぞ書たりけり

二を物れ中のゆるみびわうかくし新田とくしけをさる符を飛

都鄙數ヶ度の合戦に義君殊小敵感不淺則ち臨時の除目被行
 義貞と左近衛中将小任せられ義助以右衛門佐小被任けり天
 下の吉凶必ざりし是少の事なれども今の建武の年號と公
 家のため不吉なりとて二月二十五日に改元有て延元小被移近日
 朝廷既小逆臣の為小傾けられんとせりとも無程静謐小屬して
 一天下又泰平小帰せり此君の聖徳天地小叶へ如何なる世の末
 まて誰の傾け奉るべきと群臣のつら危き以忘まて慎むむか
 れたりける人の心ぞうたてりも頭家卿宣ひける今度の戦ひのと
 新田一人が高名小わらず我も奥州よりつらむと上京して道を
 ら所々の敵と追落し凶徒以一戦の下小西國へ退けし事義貞小劣
 べり京中數度の戦ひも新田人小勝まると戦功なり義貞に官
 位と給らば何ぞ我もそれ小洩んや捕小官位以被行りひな小無限

其戦功の諸人小勝まると宣ひり新田の人々此事を聞くと
 かさけり痛き事哉頭家義貞の武功に勝劣以論せば雲泥万里の
 異なりと欺まると又正成申されり御政道弥御ひが事わり世覆
 らん事三年の過まると新田どの中将小たりり北畠殿も何と
 ぞ位高くとちりりるべき事なり其外軍賞を行はし人々の多く侍
 らんぞろ小其沙汰なれば無賞無罰御政道哉諸國の軍勢是と
 聞ての弥君小奉思付もの有べり下愚の者の敵御方の中も互に
 語の通ざる者も多かりん小公家比御方して忠となりたる人の恩賞の
 つゆめさよ往昔小事替らちなんど笑しんぞ弥君以背り奉ら
 ん其上新田殿西國下向の沙汰なれば尊氏又責上らん事必定なる
 此度忠となりつる者今小見り朝敵とならば事疑なりとぞ申さ
 せり誠小恐しれ明智の良將かたし後あを思ひ知られけり正成も今

度忠賞なきことと色あふ不出して深く歎息せしめりつとをされ
 ば歸京のしに打出の邊へ申されし大國小國都合して兄弟小三國
 と賜ふ上へ國の望なり為家爲子孫名のたぬかれば昇殿して望を深
 き所なれ今度の武功人ふ勝りたれば今も御ゆじしを侍らぬ左わき不
 とて世の不定なれば後采の志なり。末代よ名は呼まんとあなう是心
 即徒の志と一あして某ふ一命を賜りし故ふし何する引出りのし心
 最惜さふゆふすと語り申されし上京の後新田殿へ中將小成りみ
 たれども楠の何の沙汰もなれば思地ふ向ひて申されし今度京都の
 合戦ふ討死仕らんごろ身の生残りて無本意の朝敵若發向せば一
 番ふ敵の中ふ懸入火出ろ程戦ひて討死せんごろをと申されし六聞
 人さすの楠殿も朝家と恨と申さるること心中ふあうと思ひ又口もし
 めりしける

評曰義貞朝敵と容易追退け申さるといへども猶續ひと九國の追
 下らう尊氏及び西海小波濤と起さしひる宛らも伍子胥が呉
 王夫差と諫めて越の腹心の病なりと云ふ異う守此故小正
 成義貞ふ向て上京と止め西國の發向に進めて某先陣をき由
 頼りぬ申されしれども義貞用ひざりて上京せらるる事慮りれ
 足ざり所なり此とに主上より顕家義貞の兩將九州へ發向し尊
 氏直義と誅罰せざらんふ於て上京有べし乎と重に勅定有
 ばどなる未だ九國ふ到らざりて朝敵悉く亡びて然れども主
 上山門より還幸わし事はを敵感わうて義貞顯家も後日の
 患と不顧唯當時の采と專とて正成の諫とぬせと申さる事
 最惜しき哉正成も是より後の主上の御政の不正は見るふ付て
 藤房卿隱遁の後誰有と諫むべき臣なり正成武臣の身成



圖の進昇の位の官助義貞義

朝敵
退散
ふ

太平記三篇卷十五下

三十一

とどの君も忍入して諫めんと欲すれば諸卿是は妨げ申さるふ
 よう敢て諫むべき様なり又連日數度の戦ひ正成謀とめぐるすと
 又とも諸將是と用ひて毎度軍の圖と失ふ事多し故に正成
 兼て討死と期し申されし見へし然るに正成淡川の軍討死
 の事不意の死なりと前輩の評小宣もされども何ぞ不意の
 死とせんや其故は建武三年正月二十日嫡子の方へ送り申されし
 文と以て不意の討死ふらる事は知るべし其書小曰

猶々此卷絹五ツ從

君拜受具足は先祖より差傳へ候所也長

世之形見と送り

此度隼人差下事非別事我等最期迄々と覺り願者貴殿成長の
 器量と見届ケ度候得共義之重き事難遁候愈勤学無怠成
 長之後我等心中可察候

建武三二月二十日

楠兵衛

楠庄五郎殿

兩宮戀慕基久娘

基久依邪曲被改補

斯く朝敵遠く退ひと大凶一元小歸し萬機の政改新にせられは
 愁と含み喜と懐く人多かりし中にも加茂の社に神主職に神職の
 中の重職として恩補次第ある事咎なきに改勤の沙汰有る事成
 以今度尊氏卿貞久と改て基久小補任せらる彼眉と開く事僅小二
 十日は過む天下又反覆せりかば公家の御沙汰として貞久小被改補
 度の改勤のさかす兩院の御治世替る毎に轉變する事掌と返とす
 と其逆鱗何事此起りごと尋るふ此基久一人の女あり被養て深窓

小在^ちと死^しよ^う若紫^{わかしむら}の匂^{にお}ひ^を殊^{こと}ふ^して^し初本結^{はつほんむす}の寝亂^{ねらん}は髪^{かみ}如何^{いか}なる^んと
 見^みる^に心^{こころ}も迷^{まよ}ひ^ゆべ^し齡^{とし}と^ふ二八^{にやち}成^{なり}か^む巫山^{わさん}の神女^{かみめ}雲^{くも}と^{なる}雨^{あめ}
 とあり^し面影^{おもかげ}と^{とも}王妃^{きさき}の大真殿^{おほまこと}と^出し^し春^{はる}の媚^{こぼ}と^残せ^り只^{ただ}容色^{ようしき}嬋^{せん}
 娟^{けん}の世^よ小勝^{こしょう}と^{なる}の^に非^たど^し小野^{おの}小町^{こまち}が^美び^し道^{みち}代^{しろ}学^{まな}び^優婆^う塞^{さい}の^宮
 花^{はな}の下^{した}小歌^{こた}と^詠ト^てら^うつ^ろ色^{いろ}は^悲し^りつ^ろされ^ば其情^{そのじやう}と^聞其姿^{そのすがた}と^見る
 人^{ひと}毎^ま小意^{こゝろ}以^も不惱^{なげ}と^い事^{こと}なり^しその比^{くら}先帝^{せんてい}の未^まだ^帥の^宮少^{すく}て^幽なる
 御棲居^{おんすま}を^り是^{これ}則^{すなは}ち^後宇多^{うた}院^{いん}の^{第二}の皇子^{みこ}今^{いま}延元^{えんげん}の^當今^{いま}之^{この}時^{とき}の^法
 皇^みの^{伏見}院^{いん}第一^{だいいち}の皇子^{みこ}少^{すく}て^既小春^{こはる}宮^{みや}小立^{こたて}せ^可給^べと^皆人^{ひと}時^{とき}め^合へ^り
 此^{この}二人^{ふたり}の^宮々^{ごと}如何^{いか}なる^王簾^{わう}の^隙上^{うへ}被^か御覽^{ごらん}たり^久此^{この}女^{むすめ}最^もあ^てて^ゆ
 に^鷹し^を被^か思^{おも}召^めたり^久れ^{ども}混^まら^り御業^{ごごころ}如何^{いか}と^思食^を煩^{わづ}ひ^て我^{われ}
 葉^は小傳^{こたづ}ふ^風の^便り^ふ付^つ萱^{かき}の^末葉^は小結^{こむす}ぶ^露の^香と^小寄^よて^いひ^あし^わ御^ご

文^{ふみ}の^數千^ち束^ち小餘^{こま}る^程ふ^ちる^ふち^る女^めも^いと^物わ^びし^哀を^ちる^方に
 覚^さえ^ん々^々と^も吹^ふき^定め^ぬ浦^{うら}風^{かぜ}小靡^{こな}さ^けつ^を煙^{けい}の^末も^終い^あら^う死
 名^なの^立ゆ^きし^心強^{こころ}き^氣色^{いき}を^の閑^い守^{まも}り^て早^{はや}三年^{さんねん}と^過ふ^る父
 の^賤ゆ^て母^{はは}を^藤原^{ふじ}なり^られ^ば無^な止^と事^{こと}御^ご覚^さ等^と閑^いなり^ぬ成
 聞^きく^る也^や今^{いま}少^{すく}て^御い^くとも^申さ^せる^やと^最痛^{いた}ふ^打佐^さは
 御^ご消^{しょう}息^{そく}傳^{でん}へ^る二^にの^中だ^ち次^{つぎ}で^よし^思て^たち^女の^諫め^りも^理り^ふこ
 そ^侍る^めも^早く^一方^は小^御返^{へん}事^{こと}と^かこ^ち願^{ねが}ひ^りら^れば^女云^いは^られ^りと^か
 打^{うち}佐^さは^我と^いつ^ろ分^{ぶん}く^方侍^まる^人も^只此^{この}度^{たび}の^御父^{おや}小^御歌^{うた}の^最
 憐^{あは}れ^小覚^さへ^侍らん^方へ^そ参^まら^ぬと^云て^少打^{うち}笑^{わら}ひ^ぬる^氣色^{いき}は^二人^{にん}の^媒
 嬉^{うれ}し^と聞^きて^急ぎ^宮々^の御^ご方^{かた}へ^参り^てか^くと^申せ^ば頭^{かぶ}て^伏見^{ふし}の^宮に^御
 方^{かた}より^取手^ても^らぬ^斗り^にこ^れる^紅葉^{こう}重^{かさ}の^薄様^{うす}小^何より^も言^いの
 葉^は過^すて^憐れ^をち^る程^{ほど}なり

あひまひいとんとまねがわんくまて洞の舟を云の葉もなり
と被遊り此上の哀を誰か思へる所小師の宮に御文あり是れは
るゆかりぬ花深のかり返たふ言のちて

救なれぬみの小心の夕時を強面より海もあや

と此御歌と見と女そらわらぬの覚て手小持なご伏し
るが早何とと可言程もなけは師の言に御使そらふ獨り
笑て歸り参ぬ頓て其夜の更過る程小牛車もやか取らる
て御迎ひ小参りたり瀧口なる人中門の傍ふやとひ兼て夜も
んや丑三ふちぬと急げ女下簾と褰けさせ被扶乗とける
處小父の基久外より歸り來り是れ何方へ行と問小母師宮の御召
わつくと聞ゆ父痛くとめて事此外なる態も計ひらる者くな
伏見宮の春宮小立せ給ふと由御沙汰わねは其御方へ参てこそ深山

隠きの老木も花さる春ゆ逢へる小行と人とも憑きたる師
の宮小参り仕へん事の誰が為とて可待方や有と云留めけは母
も實もと思ひく人と心小成ふたり瀧口八角ともあて簾の前小より
て月の傾きたる程と申せば母上いで合て只今俄小心地の例なれ
との侍まの後の夕べとて申て御車と返りたり師の宮のかり車
侍らる露もあらしめられどさのやと今日の憑て昨日の憂と替て
度々御使者有らふ思ひの外なる事ひ伏見の宮に御方へ参りぬ
と申けは親さけどが東路の佐野の船橋さのやの堪て人の
戀わらるべしと思ひ況せりふふ御憤りれ末深かりは師の宮
御治世の初基久さたる咎をあらうしうども勅勘と蒙り神職と被
貞久ふ被補其後天下大ふ乱れと二君三つび天位が替をせりゆ
基久貞久僅小三四年が中小三度被改補夢幻の世れなり今ふ始り

ぬ事との云なう。殊さう身の上被知て世の哀さふよ。今会とても
角てもと思ひなまは

うたぐ寝の夢よりもを以化るけり。是るる現なるる
と基久一首のうごと書留て遠ふ出家遁世の身とぞ成ふけり

評ふ曰神の非禮と受どか心の曲へつひする者の神成祭らん
神其首あやどりりかんや神主たる者の法の正直とめりなると

無道成爪もさそそそ神慮の本意をふさふ神主の身とて
かく無道ふ心曲らる神職改補の御沙汰もふ叶へり然らば

尊氏邪曲のゆのと神主とて事無道なる持明院殿も此事わ
りの儘ふ聞召まふ於る神主改補なるんやとて理りたる

かた兼好法師も此事と聞くと龍様の私曲の事神道ふ於る大ふ
是成まんと為世神とて改補せむ事最り然るを下愚

の者の重に罪ふゆとぞと思んぞれども神主於る大なる誤り
なる其罪なるも但し君に敵慮の起と思ふ世のたれと思召

べか守只女以不奉御うも深く渡らせり御憤りも然ら
は善政あわ守然とぞも善人狂人真似を即ち狂人なる

内心の不然とてども善行とせむ善人なりと謂ふ理りたる
か那

南北太平記圖會卷之十五下終



皇漢洋今古書類自家積年發兌セル者ト其集
藏畜ニ充棟載車ノ夥キノミナラス品位精工價
程清廉以テ四方君子ノ愛顧ヲ待ツ

文榮堂藏版

東區南久寶寺町四丁目 八番地

阪府書林

前川善兵衛



1712
D. 1712
1712